

「ややこしい鮭と鱒の話」

遠縁にあたる魚たち その一 コレゴヌス属
ホワイト・フィッシュ / 信濃雪鱒 PART II

鵜澤 征範

先日、佐久の飯田養魚場を訪れた所、飯田代表の取計らいで、隣接する長野県水産試験場佐久支場で行われていた、信濃雪鱒の採卵作業を見学させてもらった。通常の採卵、たとえば鮭（白鮭）など太平洋鮭類のものは、「生涯にたった一度の採卵を終えた個体は、ほどなく死滅する。」というところから、親魚を開腹して採卵する。そして、その後の受精もそうだが、一連の作業は、何とも荒っぽくてグロテスクで、いまどきの子供には見せられないようなものだ。わたしは、小学生のとき「採卵・受精」を見学したが、腹を切り裂かれ卵をかき出された魚が、次々とゴミのように木桶に投げ込まれ「ぶな」の婚姻色に染まった身体を震わせながら絶命して行くのを見るのは、なんとも腹立たしく、また、受精の方も、いわば「一夫一婦性」で繁殖する鮭なのに、ハーレムを形成し「一夫多妻性」で繁殖するあざらしや鹿のように、「10匹き分の卵は、この大きな雄一匹の精子で受精させます。」などと得意気にいわれると、「こんなこと延々と続けていると、遠い将来、鮭は悪い遺伝が広がって絶滅するぞ」などと思ったりした。雪鱒は鮭と違って「一生に一度」ではなく「一生に何度も」産卵し、またその卵は、鮭鱒の仲間であることを疑われるくらい極端に小粒である。このふたつの理由からか、雪鱒の採卵に「開腹」はない。採卵の作業は、雪鱒のストレスを最小限に行程が定められており、その作業に経験を積んだ職員が行なう。その「修練の早技」で卵を絞り出された雪鱒は、池に戻されると凄く速さで元気に泳ぎだす。見ているも気持ちのよい採卵だった。採卵された膨大な孵化瓶の中で時を過ごす。このユニークな形雪鱒完全養殖への扉を開く鍵となったよう絶えずゆるやかに循環する構造となっておた多量の受精卵が酸欠死するリスクは非常場で、世界初のホワイト・フィッシュの完民間養魚場への稚魚の配布が始まり、ほどや稚魚の配布、養殖法の伝播も始まった。濃雪鱒の養殖事業は順調で、さらに「分家」「会津ユキマス」、愛媛県の「ヒメノユキマス」も生産されるまでになった。



雪鱒は、長野県内の立岩湖、加和志湖、松原湖、柳保池、中網湖、白樺湖に放流され釣りの対象魚になっている。ただどこも釣果は芳しくないようで「釣りにくい魚」と知られ、また、「あまりの釣れなさ」が、全く逆に釣人の人気を呼び、各々の湖を認める釣人は決して少なくはないときいた。わたしは北欧、東欧北部、北米のアラスカ、カナダなどで、度々、ホワイト・フィッシュ（雪鱒）釣りを楽しんだが、決して釣りにくい魚ではなく、レイク・トラウトやアークティック・チャアに較べれば、むしろ釣り易く、とくにアイス・フィッシング（氷穴釣り）では、好釣果をあげたことが多い。日本で「氷穴釣り」というと、北海道など、少数の限られた釣り場を除けば、冬の風物詩ともいえる「わかさぎの穴釣り」のことだが、残念ながら、「わかさぎ釣り」はスポーティングではない。それに、「喰い渋る魚を何とか掛け、氷穴の縁にこすれただけで、プツンといってしまうような細いラインをキュンキュンと糸鳴りさせて、大物とわたり合い、頃合いは良しと魚体を氷穴より引き抜き、氷上にランディングする。」とこんなスリルも達成感もない。だからこそ、本能的にそれを味わいたいがために、「釣りにくい魚」を「釣り上げる」ために、雪鱒のいる湖へと出かける釣人は、決して少なくないと思う。わたしは、日本での雪鱒釣りの経験がなく、中網湖、白樺湖で釣りしたのは、雪鱒放流前の昔の話で、現在の湖の状態、状況、遊漁規則なども知らない。しかし、国外での雪鱒釣り（とくにアイス・フィッシング）の経験はそこそこあるので、「ご参考までに」といくつかのアドバイスをしよと思う。まず、雪鱒は極めて北方系の魚で、岩魚でも元気をなくすくらいの低水温を好む。天然もので在来種の雪鱒は、北緯 50° より北の地域に分布する。北緯 50° といえば樺太（サハリン）の真ん中（かつての日本とソヴィエト・ロシアの国境線）で、東欧ではチェコの北側、北米東部では五大湖より北、西部ではヴァンクーヴァーより北、ということになる。しかもこれは「南限」であり、「北限」ともなれば北極圏だ。また、雪鱒分布域の人々は、「あの魚はアイス・フィッシングが一番釣れる」と口を揃えて言う。これからわかるように、長野で雪鱒を釣るなら、「結氷期のアイス・フィッシングしかない」となる。また、湖は深くなれば深いほど水温が下がって低水温にはなるが、それとは裏腹に水中溶存酸素量が減少するため、魚の動きは鈍くなり、湖底近くに豊富な湧水でもないかぎり、酸欠の危険すらある。湖が結氷すれば、酸素の多い上層まで低水温が促されるので、冷水魚は

絞り出される雪鱒の卵。その後、受精させ孵化瓶へ納める。水温は6℃、2ヶ月あまりで孵化し、稚魚が誕生する。

数の卵は、場内の孵化室に林立した、特性状と機能をもつ孵化瓶の開発が、世界初のだ。瓶内は、水温5℃以下に保たれた水があり、水中溶存酸素量も安定し、中に収まっに少ないようだ。1978年、ここ佐久支全養殖が成功し、その5年後の1983年には、なく、日本各地の水産試験場への、発眼卵以来、40数年を経た現在、佐久の「本家」の「信した北海道の「キタノユキマス」、福島県など、「ご当地サーモン」ならぬ「ご当地雪



信濃雪鱒 揺籃の地
長野県水産試験場 佐久支場



佐久養殖漁業協同組合
大岩魚を連想した、なかなか粋な看板だ。



飯田代表と雪鱒

飯田養魚場育ちの魚は、成育、健康ともに良好、そしてとても味が良い。



ユニークな孵化瓶

受精卵は孵化して稚魚となるまで、この瓶の中で過す。

取材協力

飯田養魚場

<http://www.yukimasu.co.jp/>

長野県水産試験場佐久支場

より活発になる。昔、私の師匠が、「わかさぎは穴釣りのとき、ほかの魚と違い、寒くなればなるほど良く釣れる。」と教えてくれたが、確かにその通りで、雪鱒は「それ以上に寒いくらいが良い」のだ。ただ、もうひとつ肝心なのが「気圧」で、いくら寒くても、これが低いといい釣りができない。以前、続けて一週間あまりの毎日、アイス・フィッシングをしたことがあるが、気圧の低い日は喰いが悪く釣果が伸びず、喰いが浅いためバラシも多い。よく「〇〇のバロメーター」と表現されるが、雪鱒釣りには「気圧計」がその名の通りバロメーターとなる。狙いどきは「気圧が高めに安定しているとき」、「低気圧が続いた後、高気圧に転じたとき」とくに後者は「大釣り」が望める。そして氷上での注意、「氷上では音や振動が増幅されて水中にじかに伝えるので、静かに釣ること。」これはかなり大事で、北米の先住民たちは、「氷穴釣りの時、よく騒ぐ子供たちは置いて行け」という。「早く専用の釣り具一式（竿は自竿が一番だ）を揃えること」— 欧米のアイス・フィッシング、ロッドというのは24" ~ 30" (60cm ~ 76cm) のものが主流で、ミディアムより上の大物用は、28" (71cm) が多い。穂先は柔らかく、幾分クウィック・テーパーで、バットが強いものが望ましい。雪鱒の引き力は、レイク・トラウトやアークティック・チャアほどではないので、ミディアム・ライト以下の中物用でも対応できる。グリップは目が疲れず、大物とのファイトにも有利。リングやシートなどは樹脂製のものが良い。金属製だと指が冷えて釣りにくい。ガイド・リングは凍結に備えて口径の大きなもの、リールも、凍結に強いスピニング・リールであることが多い。バックテイル・ジグのようなルアーでも釣れるし、姫鱒のように「サビキ」でも釣れるが、（但し、北米でこの仕掛けを使うと違法となることが多く「逮捕」もあるので使えない。）一番良いのは、「生きた小魚」を使つての餌釣りで、釣ったわかさぎを餌にしても良いが、凍らず保温できる容器に入れて、もつで / くちぼそ、あぶらはやなどの小魚を持って行くのが良い。仕掛けは、底ベタでも底少し上でも就餌できる胴付き仕掛けが良い。雪鱒はたいてい「底ベタ」で就餌するが、「少しだけ上」も有効だし、「生き餌一尾」VS「生き餌二尾」だと、より目立ち易いせいか、断然「一尾より二尾」が効果的だ。但し、仕掛けに工夫を凝らすこと、仕掛けをゆっくりたらずこと、これも守らないと、仕掛けの絡みが増えてしまう。雪鱒の口元は、他の鮭鱒類と異なり、口は小さ目で、魚食族の魚の典型である「受け口」ではない。また、引き力も「剛力」ではないので、釣は小さ目で良い。赤チヌ2号か3号の小鈎で、50cm 超えを何本も止止めたが、強度は充分だった。さらに線径が細く、小さくて、軽い鈎は、生き餌の負担が少なく、泳ぎも、保ちも、良い。鈎は尾びれの付け根より少し前に「尻掛け」にする。生き餌はよく泳いで誘いとなり、就餌する魚の方も、頭からスッポリ吸い込むように喰い付くので、喰いも、掛かりも良くなるようだ。